
雪の花と白銀の刃

ケイロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の花と白銀の刃

【NZコード】

N6084Z

【作者名】

ケイロン

【あらすじ】

人々は怪物^{ディープル}に攻められ、戦争が起きた。大地は汚染され、人々は『半地下都市』で暮らすこととなつた。ディープルに対抗する『力』を人々は手に入れた。

大切な人を失い『力』を手に入れた少年、雪平誠はこの世界で何を見るのだろうか。

主人公は最強にする予定ですが、少し苦戦する程度になると思います。

プロローグ ある哀しい男の夢（前書き）

プロローグですのでかなり意味不明な感じになつてしましました。

プロローグ ある哀しい男の夢

遠い遠い雪国の夢を見ていた。

「さん、そんな所で寝ていると風邪をひきますよ。」

黒髪が腰に届くほどある周りの雪の様な驚くほど白さの肌をした少女が目の前にいた。

「ん？ ああ、すまない。おはよう、ゆきか雪香。」

声から察するに俺は男みたいだ。

「おはよう、じゃないですよ。こんなに雪が積もって。」

そう言つて彼女 雪香 は俺の頭の雪を払つた。俺はだれなんだ？ ここはどこなんだ？ そんな俺の疑問を無視して進んで行く。辺りを見渡すと一面真っ白だが、かなり広い庭園みたいだ、そして今俺は縁側の様なところで脚を投げ出して寝転がつていた。

「それでは さん、私は少し出掛けますね。」

・・・ダメだ、ダメだ、行つてはいけない。

「んじゃあ、俺はのんびり過ごすよ。」

なぜかそう思つたが、俺の身体は笑顔で彼女を送り出していた。なんでそう思うんだ？ でも、後悔する。そんな気がする。絶対に止めないと。

・・・行くな！ 行つたら。

プロローグ ある哀しい男の夢（後書き）

不定期投稿になりますがよろしくお願いします。

喪失と力（前書き）

後も少しだけ戦闘場面になる予定です。感想、疑問点があればコメ
ントください。

喪失と力

辺りには血だまりと赤黒くなつた『人』だつたものが散らばつていた。

「何だよ… 何なんだよ！」

周りで起こつたことを認めたくなくて俺は叫んでいた。

目の前にはねじ曲がつた角、毛が筋肉質な身体を覆つっていた。目は獰猛に光り、大きな爪のついた手から血を滴らせていた。

『ディープル』

ソイツは人々からそう呼ばれていた。

ディープルは、突如現れたわけではない。昔から人々の暮らしの隙間の闇に潜んでいた。東洋の国では妖怪やアヤカシと呼ばれるたものだ。

だが、ディープルもその頃は、それほど強大ではなく、闇にひつそりと隠れていた。

しかし、何のためにか人類に攻撃を仕掛けてきた。2020年に始まつた戦争は、10年にも及び、辛くも人類の勝利だつた。その一方で、戦うすべの無いものは殺され、人口は、世界で最も多かつたときの六割となつてしまつた。

地上はディープルが

徘徊し、大地の大半は汚染され地下で暮らす人々がふえていった。

『半地下学園都市エデン』あらゆる学校が集合し、形成された地下都市の一つである。しかし、全ての住民が学生のわけではなく、卒業してもそのまま残る人がほとんどである。

俺、雪平誠(ゆきひらまこと)もこの都市の第二普通科学校に通つている。今日は日曜日で両親と買い物をしていた。男子の友人と途中で会い楽しく買い物をしていた。さつきまでは。

「父さん、母さん、みんな？」

誠の呼び掛けに答える者は誰一人いない。

「ヒロ〇〇〇〇〇〇！」

田の前の化物が口から血肉を飛ばしながら雄叫びをあげた。むせ返すような血生臭さだ。

「・・・何でだよ・・・お前は・・・お前はああつ！ 殺す！殺す殺す殺す！」

誠の身体から美しくも鋭い光で覆われていた。

「こちら、ディープル対策本部総司令官神有だ。つい先程少年がギガス型ディープルを撃破したところを目撃した。そうだ、ユニークと断定できるだろう。少年は現在気を失つており、このまま本部に搬送しようと思う。ああその通りだアリス。この少年がいい戦力になることを願おう。」

本部の副司令官アリスとの電話を終えた神有美月は少年の頬を撫でた。

「全く、どうしたらこんな風に殺せるの。あなたはもしかして英雄？ それとも救世主？」

身体中を氷漬けになつたギガスを見、そう呟いた。

「もしもし榛名？」

「うん、何、兄さん？」

誠は携帯で妹の雪平榛名に電話をかけていた。

「いや、あのさ、これから家に帰ろうと思つんだけど帰つたら大事な話をする。」

「大事な話？ ・・・うん、わかつた。何の話かわからぬけどかなり大事なんだね。」

妹はまだディープルが入り込んでいたことを知らないようだ。妹とは、血が繋がっていないが、お互いの事は信頼していた。

「それじゃあ切るからね。」

「うん。」

誠は深いため息をつき、家に向かって歩き始めた。

あの後、誠は対策本部に搬送され目を覚まし、自分に『ディープルを倒すための『力』があることを知らされ、対策室に入隊することになった。妹に会つて両親たちが殺されたことを話すため一時的に対策室から出てきていた。

「普通は一般人に対策室のことを詳しく話すのは禁じられているんだけどな。」誠は家の前で独り言を呟いていた。

「ただいま」ドアを力なさげに開け、目の前に榛名がいることに気付いた。

「お帰り・・・」誠と一緒に両親たちがいないことに気付き、自然と兄が言いたいことを察した。

「・・・・」
「・・・・」

二人ともなにも言わず居間にあるソファーに向かい合つて座った。

「・・・父さんと母さんは・・・さつきディープルに殺された」「・・・つづく！」榛名は予想はしていたがディープルの単語が出た瞬間、榛名の身体は強張った。

「何で？何で！対策室の人たちかがディープルから私たちを守つているんじゃないの！」榛名は兄に聞いても意味がないことを分かっているが兄に怒鳴つて尋ねた。

「・・・討伐漏れだそうだ。」

「・・・討伐漏れ？」兄から答えが帰つてくるとは思つていなかつた榛名はさつきまでの怒りより驚きがうわまつた。

「それ、どういうことなの？何で兄さんが知つているの？」

「ああ、そう言うことか、兄は『力』を手に入れたんだ。だから今生きて目の前にいるんだ。」

榛名は兄が対策室に入ることを悟つた。

「俺は『力』に目覚めた、だからディープル対策室に入ろうと思う。そして俺達の様なやつをつくらないために頑張りたい。」

兄は確固たる決意を宿した目で自分の意思を話した。

「・・・わかった。兄さん、これから言つことを約束して。」榛名は兄とずっと離れたくない気持ちを無理矢理押し殺し、口を開いた。

「絶対に死なないで。絶対につ・・・」

途中から涙がこみ上げて来て兄に抱きついた。

「死なないで。絶対につ・・・」

誠は涙に濡れ崩れても綺麗な顔立ちの妹を優しく抱き締めた。

「ああ、俺は絶対に死なない。」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

どのくらい経ったかわからないが涙が収まつた妹を抱き締めるのを止めた。

「・・・もう一つ約束して。」

「ん？何だ？」

「暇なときでいいから連絡をして。」

「わかつた。なるべくするよ。」

この後、誠たちは夜遅くまで今までこれから話を話し合つた。

「兄さん、それじゃあちゃんと約束守つてね。」

「勿論だ。俺が今まで榛名とした約束を破つたことがあつたか

？」

「一人とも昨日で両親たちが死んだことに吹つ切れ、笑顔で別れの言葉を言つていた。

「そろそろいい？もう時間なんだけど。」

美月は対策室の口ゴガはいつた車の助手席から顔を出し、二人のやり取りを微笑ましく見ながら告げた。

「すみません、神有司令。」

誠は笑顔のまま答えた。そのまま車の後部座席に乗り込みドアを

閉めた。

「ちゃんと約束守つてね～！」

手を振る榛名に窓から手を振り返し、窓を閉めた。

「かわいい妹さんじやない。」

「ええ、自慢できます。でも俺がいない間の悪い虫が付かないか心配ですよ。」

「それは大丈夫じゃない。」美月は、意味深な笑みを浮かべた。

「？」

そんな事を美月が思つてゐるなんてわからず首を捻つていた。

ブロロロ… キー一車が半地下都市の『天井』と言える場所まで登り『ディープル対策本部』とかかれたかなりデカイ建物の前で止まつた。

「ようこそ『ディープル対策本部へ！・・・ ていつても昨日ここに搬送されたんだよね。」

「いえ、昨日は頭が混乱していてよく覚えていませんでしたから。」

誠はこの建物の大きさに驚きながら答えた。

車から降り、筋肉がよく付き、体格の良い門番一人の間をとおり、建物の中に入り対策室の説明を廊下を歩きながらした。

「まず対策室は世界中にあるこの対策室はそのなかでも、最も規模が大きいものの一つよ。まあここはコーリア大陸の対策室の本部だしね。」

「でも何で学園都市のここが本部なんですか？普通、本部とかつて大人が多くいるところになりそうな気がするのですが。」

「そうね、他のオーリア大陸、ノーアメリカ大陸なども大人が多いところが本部なのは事実。でも学生だから弱いというわけではないの、それに危険を犯してまで守りたいものがある人は大人も子供も関係なく強いの。」

誠は十六才である自分より少し年上の筈なのにその言葉はひどく

大人に聞こえた。

「さて、もう着いたわ。」

少し大きめの扉の前で止まり、準備はいい？という視線を美月は誠に合わせ、扉を開けた。

出会いと戦闘準備（前書き）

感想、疑問点があればコメントください。

ガヤガヤとしていたが美月が入ってきたことで静かになった。この部屋はかなり大きい講堂のようだった。その講堂の中にぎゅうぎゅうとまではいかないが、かなりの人がいた。

「急に集まつてもらつてすまない。これから新しくこの対策室に入ることになつた雪平君を紹介しよう。」目でほら早くと促された。にしても大半が『女子』なのはなんでなんだ?男女比が2:8だぞ。・・・まあいいや。

「えー、雪平誠です。空から降る雪に平らの平に誠実の誠です。えーと、誕生日5月5日で一昨日十六になつたばかりです。えー、これからよろしくお願ひします。」

かなりの人に注目され、緊張しつぱなしだ。

「これから雪平君は我らの仲間となつたのだ、彼の面倒を見てく
れ。・・・わかつた、わかつた、それでは質問タイムだ。」隊員の
主に女子 視線に負け美月は誠に後始末を任せた。

「雪平君。ううん、誠君つてよんديいい?」

「キャー! やつと私好みのイケメンが入つたわ!」

「彼女は、彼女はいるの?」

「好みの女性は? 年上なんてどう? 私十八なんだけど。」

「あ、いや、あの、その」

一気に尋ねられしどろもどろとしていると、

「ええい! 黙れ! 誠が困つているだろ!」

髪が金髪でツンツンした男子が叫んでいた。

「うるさいわね! 金髪は黙つてなさい!」

「そうよ! たくわんはおとなしくしていればいいの!」

「いつもいつもうるさいの! たくわん!」その男子は壮絶なブーリングにあつていたが次第に收まり、金髪男子は誠に言つた。
「俺はレオン、レオナルド・シュタイン。西の方の出身だ。よろ

しく誠。」

手を出して握手を求めてきた。

「ああ、よろしくレオン。」

握手をしながら答えた。

「ハイハイ。それじゃあ私の質問からね。いつの間にか質問する順番をきめていたようだ。

「その髪の一部が白っぽいの染めたの？」

やつぱりそのことを聞かれたか。

「いや、違うよ。『力』に目覚めて使用した時になつたんだ。もう一度使うと全部真っ白になるらしい。」

そう、白というよりは銀に俺の髪はなつていた。

「それじゃあ次はー、彼女さんはいるの？」

・・・・はあ

「今までモテたためしがないから、できたことがない。」

実際、付き合つた人は皆無だ。まったく、バレンタインで義理チヨンは大量に貰うのに。義理だからか？義理だからなのか？

「えー！ウソー？そんなモデルばりにカッコいいのに。・・・私が頂こうかしら。」

最後に何かボソツと言つていたが。まあいいや。

「それを言うなら、君こそかわいいんだから、彼氏とかいるんでしょう？」

事実、結構ここにいる人は美少女率が高い気がする。

「かつ！かわいいなんて！・・・ボンツ」

・・・名前の知らない女の子が顔を真つ赤にして倒れてしまった。
何か俺変なことしたつけ？

「それでは雪平君には第一小隊に入つてもらう。凛華、よろしくたのんだぞ。」美月は先程の騒ぎが収まつた後、俺の所属先を話していた。

「雪平様、わたくしは、第一小隊長神有凜華です。神有司令の妹

かみありりんか

です。よろしくおねがいします。」ストレートの髪はポニー・テールになっていて、美月と同じ青色の髪は腰に届くほどの中さだ。顔は

色白でどこかのお嬢様のようだが目は鋭いとまではいかないけど、

意思の強さを感じる。

「ああ、よろしく俺のことは誠つて呼んでくれない？そっちのほうが慣れてるから。」

「わかりました、誠様。」

・・・なんで『様』がつくんだ？

考えていると突然

「よつす、誠。」

レオンが話し掛けてきた。

「レオンも第一小隊なのか？」

「そうだ、ちなみにさつきお前が陥落させたリリアとももう一人が第一小隊だ。」

さつき？陥落？何言っているんだ？

「あ、あの誠君、私、リリア、よろしくね。」

さつき俺に質問をしていて倒れた娘だ。まだ少し顔が赤い。

「よろしく、リリア」

リリアは茶色っぽいセミロングの髪型で少し活発な感じだが、品のある顔立ちをしている。それから少しリリアと話し、打ち解けてきたところでもう一人がきた。

「・・・真奈、私の名前は聖真奈。」

小柄な体格で顔は無表情だが整った人形のような可愛らしさがある。髪は銀髪で足の付け根ぐらいまでの長さだ。

「ああ、これからよろしく。」

「コクツ

真奈が軽く頷いた。

「真奈が自分から話し掛けるなんてめずらしいね。」

「コクツ

リリアが尋ねたが誰にでもそうらしい。

『ディービィービィー、ディーブル出現、地上エリア第三区にて

応戦せよ。第一小隊出撃準備。ディーブル出現、第一小隊出撃準備。

』

誠たちは趣味など他愛のない話をしていたが突然の警報に誠は驚いた。

「これ何なの？ディーブル出現つて。」

「ディーブルがエテンに近付いて来たということです。」

凜華が丁寧に答えた。

「ああ、それに俺ら第一小隊が出撃みたいだな。」

レオンたちは話しながら講堂を出て第一小隊室に入つた。

「ほらよつ。」

レオンは誠に黒い服を渡した。

「それは小隊ごとに渡される戦闘服だ。」

なるほど、これを着て戦うんだな。背中の部分に『?』と銀色で書いてあつた。

「その『?』っていうのは、第一小隊だといふことを表しているんだ。まあ言わなくてもわかるだろ？が他の隊も、それぞれ番号が背中にある。」

第何小隊まであるんだろう。

誠は下らないことを考えながら『服』を着ていた。

レオンは残念だと言つていたが男子と女子でカーテンで区切られている。

まあ、普通だよな。

戦闘服は身体にピッタリと合つたが、誠はディーブルと戦うことを考えており、そのことを疑問に思わなかつた。

対策室は地下と地上がつながつていて、ディーブルが汚染地区から出て来て、近くに来ると出撃し、殲滅する、ということをしている。都市は汚染されていない地区に作られている。ちなみに対策本

部であるここには、隊員たちのためにあらゆる設備が整つていて、隊員は皆、対策室の中の寮で暮らしている。作りは1レドくらしく、ほとんどの隊員は食堂で食べているらしい。プール、体育館、ウェイトルーム、グラウンド、温泉まである。そして小隊ごとに小隊室が与えられていて、武器など様々な物を置ける。要するに学校の部室みたいなもんだな。

「ん？ 誠は、なんも武器もたないの？」

「？ ああ、何か俺ユニークって言ひやつらしい。珍しいの？」

そう、俺は『力』を使うことで武器を作れる。まあ俺はそれだけじゃないらしいが。

「当たり前だろ！ 『力』を手に入れる人は結構多いが、ユニークはその中で珍しいんだよ。」

「へえー。」

「・・・何で驚かないんだ？ 普通、他の人と違つたら、『俺は選ばれし者だ』って言う風になつて威張るだろ？」

「いや、ユニークだからといって強いとは限らないだろ？ それに強いからって威張つて何にもならないしな。」

「・・・お前つてやっぱり珍しい奴だな。そんな事言えるなんて。」

「えつ？」

何か失礼なこと言われた気がする。

「まあ気にはしない。俺がもつとお前に惚れただけだ。」

「やめろっ！ 気持ち悪い。男に惚れられたくない。」

こいつは何なんだ、そつちの人なのか？

そういう事を話しながら地上エリア第三区の『扉』に着いた。

「第一小隊、出撃準備完了。いつでも行けます。」

凜華が戦闘服に付いている小型無線機で指示を待つていてる。

「今回はギガス型だ。数は五体。・・・それでは出撃！ 生きて帰つてこい！」

美月の声とともに扉を開け、誠たちは戦いに向かった。
今と明日を生きるために

出会いと戦闘準備（後書き）

次、戦闘場面になる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6084z/>

雪の花と白銀の刃

2011年12月21日12時58分発行